

0.1 ファイバー束の Spectral 列

Definition 0.1.1

$p : E \longrightarrow X$ を fibration とし、 X は CW 複体で $X^{(0)} = *$ であるものとする。 X には skelton filter $\{X_s\}$ が存在するので、 $E_s = p^{-1}(X_s)$ とおけば、 $E_{-1} = \phi, E_0 = F$ となる $\{E_s\}$ は E の filter である。

Lemma 0.1.2

$\{E_s\}$ は E の連結な filter である。

proof) $p : E \longrightarrow X$ を fibration とすると、その制限 $p_s : E_s \longrightarrow X_s$ も fibration である。これより、

$$p_* : \pi_*(E, F) \longrightarrow \pi_*(X) \quad , \quad p_{s*} : \pi_*(E_s, F) \longrightarrow \pi_*(X_s)$$

が全単射となるので、 (E, E_s, F) と (X, X_s) の完全列と five lemma から、 $p_* : \pi_n(E, E_s) \longrightarrow \pi_n(X, X_s)$ が全単射であるので、 $\{X_s\}$ は連結な filter なので、 $n \leq s$ に対し $\pi_n(E, E_s) = \pi_n(X, X_s) = 0$

Remmark 0.1.3

$p : E \longrightarrow X$ を CW 複体上の fibration とすれば、 E の連結な filter $\{E_s\}$ に対し (コ) ホモロジースペクトル列、 $\{E_r^{**}(E; M)\}$, $\{E_r^{**}(E; M)\}$ を考えられる。

Lemma 0.1.4

$p : E \longrightarrow X$ で X は可縮な fibration とする。このとき、 p は自明な fibration $X \times F \longrightarrow B$ と同型である。また、このとき、 $\varphi, \chi : X \times F \longrightarrow E$ をそのような fiber homotopy equivalence し、ある $x \in X$ に対し、 $\varphi|_{\{x\} \times F} \simeq \chi|_{\{x\} \times F}$ ならば、 φ と χ は fiber homotopic である。

proof) X を可縮な空間とし、 $p : E \longrightarrow X$ を fibration とする。このとき、 X 上の恒等射と定値写像が homotopic なのだから、その pull back は fibration の同型となる。ところで、恒等射の pull back は $p : E \longrightarrow X$ 自身であるし、定値写像の pull back は自明束 $X \times F \longrightarrow X$ である。

また後半の主張は、 X が可縮なので、定値射 c_x と恒等射は homotopic になり、

$$\begin{array}{ccccc} X \times F & \xrightarrow{c_x \times 1} & X \times F & \xrightarrow{\varphi} & E \\ \downarrow = & & \downarrow = & & \downarrow = \\ X \times F & \xrightarrow{=} & X \times F & \xrightarrow{\varphi} & E \end{array}$$

の図式は homotopy 可換で上の合成が $\varphi|_{\{x\} \times F}$ と思ってよい。 χ にも同じことを施して繋げれば、 $\varphi \simeq \chi$ であることがわかる。

Lemma 0.1.5

$p: E \rightarrow X$ を fibration とする。 $f: Y \rightarrow X$ が同相ならば、 $p^*(f): f^*(E) \rightarrow E$ は fiber homotopy equivalence である。

proof) 仮定より $g: X \rightarrow Y$ が存在し、 $f \circ g = 1$, $g \circ f = 1$ を満たす。

$$\begin{array}{ccccc} g^*(f^*(E)) = E & \longrightarrow & f^*(E) & \longrightarrow & E \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow p \\ X & \xrightarrow{g} & Y & \xrightarrow{f} & X \end{array}$$

下の合成が恒等射であり、その pull-back も恒等射であったので、題意は示される。

Lemma 0.1.6

$p: E \rightarrow X$ を CW 複体上の fibration とする。 X の n 胞体 e_λ の特性写像、

$$\varphi_\lambda: (D^n, S^{n-1}) \rightarrow (X_n, X_{n-1})$$

を考えたとき、 D^n は可縮なので、 φ_λ の pull back $\varphi^*(D^n)$ は自明束と考えてよい。よって bundle map

$$\tilde{\varphi}_\lambda: D^n \times F \rightarrow E$$

を考えれば、これは対の写像、

$$\tilde{\varphi}_\lambda: (D^n \times F, S^{n-1} \times F) \rightarrow (E_n, E_{n-1})$$

と考えられる。このとき、

$$\oplus \tilde{\varphi}_{\lambda*} : \oplus H_*(D^n \times F, S^{n-1} \times F; M) \longrightarrow H_*(E_n, E_{n-1}; M)$$

は同型である。

proof) D^n の部分空間、

$$D_0^n = \{x \in D^n \mid 0 \leq |x| \leq 1/2\}, \quad D_1^n = \{x \in D^n \mid 1/2 \leq |x| \leq 1\}$$

を考える。 D_0^n は可縮で、 S^{n-1} は D_1^n の強変位 retract であり、 $D_{1/2}^n = D_0^n \cap D_1^n \cong S^{n-1}$ とおく。

$$\begin{array}{ccccc} \oplus H_*(D^n \times F, S^{n-1} \times F) & \longrightarrow & \oplus H_*(D^n \times F, D_1^n \times F) & \longleftarrow & \oplus H_*(D_0^n \times F, D_{1/2}^n \times F) \\ \downarrow \oplus \tilde{\varphi}_\lambda & & \downarrow \oplus \tilde{\varphi}_\lambda & & \downarrow \oplus \tilde{\varphi}_\lambda \\ H_*(E_n, E_{n-1}) & \longrightarrow & H_*(E_n, E_{n-1} \cup p^{-1}\varphi(D_1^n)) & \longleftarrow & H_*(\cup p^{-1}\varphi_\lambda(D_0^n), \cup p^{-1}\varphi_\lambda(D_{1/2}^n)) \end{array}$$

の可換図で、横列はすべて inclusion からの誘導である。このとき、

$$(X_n, X_{n-1}) \hookrightarrow (X_n, X_{n-1} \cup \varphi_\lambda(D_1^n))$$

は homotopy 同値であるため、

$$(E_n, E_{n-1}) \hookrightarrow (E_n, E_{n-1} \cup p^{-1}\varphi_\lambda(D_1^n))$$

も homotopy 同値である。また切除定理を使えば、この横列はすべて同型である事がわかる。そして、一番右の縦列を考えれば、

$$\varphi_{\lambda|_{D_0^n}} : D_0^n \longrightarrow \varphi_\lambda(D_0^n)$$

が同相であり、その pull back での fiber map は Lemma 0.1.5 やはり同相である。よって元の可換図は右列は同型であるため、左列が同型である。係数の M はスペース上省いてしまったが、あっても成立する。

Corollary 0.1.7

$p: E \rightarrow X$ を CW 複体上の fibration とする。このとき、

$$H_p(X_p, X_{p-1}) \otimes H_q(F; M) \cong E_{p,q}^1(E)$$

が存在する。

proof) キュネットの公式を用いれば、

$$H_p(X_p, X_{p-1}) \otimes H_q(F; M) \cong \oplus H_p(D^p, S^{p-1}) \otimes H_m(F; M) \cong \oplus H_{n+m}(D^n \times F, S^{n-1} \times F; M)$$

$E_{p,q}^1(E) = H_{p+q}(E_p, E_{p-1}; M)$ だから、Lemma 0.1.6 により求める結果を得る。

Definition 0.1.8

Cor 0.1.7 において q を固定すれば、 $H_q(F; M)$ を係数と考えられ、

$$\varphi: C_*(X; H_q(F; M)) \rightarrow E_{*,q}^1(E; M)$$

と言う Chain complex の間の同型が構成できる。ただし、左側は X の胞体的複体である。

ここで φ は、 $x \otimes y \in C_p(X; H_q(F; M)) = H_p(X_p, X_{p-1}) \otimes H_q(F; M)$ に対し Hurewicz 準同型、

$$h: \pi_p(X_p, X_{p-1}) \rightarrow H_p(X_p, X_{p-1})$$

(X_p, X_{p-1}) は $(p-1)$ -connected なのでこれは同型であるため、 $[\alpha] \in \pi_*(X_p, X_{p-1})$ が存在し、 $h([\alpha]) = x$ となる。

$$\alpha: (D^p, S^{p-1}) \rightarrow (X_p, X_{p-1})$$

であるので、この pull back から誘導される fiber map

$$p^*(\alpha): (D^p \times F, S^{p-1} \times F) \rightarrow (E_p, E_{p-1})$$

を考え、これを、 $\tilde{\alpha}$ とかく。

$$\tilde{\alpha}_*: H_{p+q}(D^p \times F, S^{p-1} \times F; M) \rightarrow H_{p+q}(E_p, E_{p-1}; M)$$

において、 $i_p \in H_p(D^p, S^{p-1}) \cong \mathbf{Z}$ を生成元とすると、 $\varphi(x \otimes y) = p^*(\alpha)_*(i_p \times y)$ である。

Lemma 0.1.9

$p : E \rightarrow X$ を CW 複体上の可符合な fibration とする。 $f : (Y, B) \rightarrow (X, A)$ において Y を可縮な空間とする。このとき、

$$\tilde{f}_* : H_{p+q}(Y \times F, B \times F; M) \rightarrow H_{p+q}(E, p^{-1}(A); M)$$

は f のホモトピー類にのみ依存する。

proof) まず f を固定すれば本来 pull back による fiber map $p^*(f) : f^*(E) \rightarrow E$ は唯一に定まる。ただし、ここでは Y が可縮なので $f^*(E)$ と $Y \times F$ が同型なので同一視した。このときその同一視をした homotopy equivalence である $h : Y \times F \rightarrow f^*(E)$ の構成を思い出す。定値射と恒等射を繋ぐ homotopy $H : Y \times I \rightarrow Y$ に対し、 $g(y, e) = (*, e), G(y, e, t) = f \circ H(y, t)$ とおき、

$$\begin{array}{ccc} Y \times F & \xrightarrow{g} & f^*(E) \\ \downarrow i_0 & \nearrow \tilde{H} & \downarrow f^*(p) \\ Y \times F \times I & \xrightarrow{G} & Y \end{array}$$

に対し、 $h(y, e) = \tilde{H}(y, e, 1)$ としたのであった。

$$\begin{array}{ccccc} Y \times F & \xrightarrow{h} & f^*(E) & \xrightarrow{p^*(f)} & E \\ \downarrow & & \downarrow & & \downarrow p \\ Y & \xrightarrow{=} & Y & \xrightarrow{f} & X \end{array}$$

において、上横列の合成が \tilde{f} である。ここで、 h は H やその lift である \tilde{H} に依存する。そこで、 $y \in Y$ において、 $\tilde{f}_y = \tilde{f}(y, \cdot) : F \rightarrow E$ を考えると、これは $pr_2 \circ \tilde{H}(y, \cdot, 1)$ であるが、先の図式を y に制限すれば、

$$\begin{array}{ccccc} F & \xrightarrow{g_y} & f^*(E) & \xrightarrow{p^*(f)} & E \\ \downarrow & \nearrow \tilde{H}_y & \downarrow & & \downarrow p \\ F \times I & \xrightarrow{G_y} & Y & \xrightarrow{f} & X \end{array}$$

の図式で上横列の合成は inclusion であり、 G_y は y と $*$ を繋ぐ path から定義されるので、下横列合成は $f \circ H_y : I \rightarrow X$ と考えられる。というわけで、容認写像の定義に

もどると、

$$\tilde{f}_y = pr_2 \circ \tilde{H}_{y,1} = L_{f \circ H_y}$$

というわけで \tilde{f}_y は容認写像である事がわかる。ようやく本題に戻るが、 $h, h' : Y \times F \rightarrow f^*(E)$ という2つの homotopy equivalence が取れたとする。 $\tilde{f} = h \circ p^*(f)$, $\tilde{f}' = h' \circ p^*(f)$ を考えると、 \tilde{f}'_y の homotopy inverse を \tilde{f}'_y^{-1} とおくと、 $\tilde{f}'_y^{-1} \circ \tilde{f}_y : F \rightarrow F$ も容認である。

$$\tilde{f}'' = \tilde{f}'(1 \times \tilde{f}'^{-1} \circ \tilde{f}) : Y \times F \rightarrow E$$

を考えると、可符号性から

$$\tilde{f}''_* = \tilde{f}'_* \circ (1 \times \tilde{f}'^{-1} \circ \tilde{f})_* = \tilde{f}'_* \circ (1 \times \tilde{f}'^{-1} \circ \tilde{f})_* = \tilde{f}'_*$$

でありまた、

$$\tilde{f}''_y = \tilde{f}'_y \circ \tilde{f}'_y^{-1} \circ \tilde{f}_y \simeq \tilde{f}_y$$

であるので、Lemma 0.1.4 により $\tilde{f}'' \simeq \tilde{f}$ となり、 $\tilde{f}''_* = \tilde{f}'_*$ となるので、結局、 $\tilde{f}_* = \tilde{f}'_*$ である。

また、 $f \simeq f' : (Y, B) \rightarrow (X, A)$ に対し、 $H : (Y \times I, B \times I) \rightarrow (X, A)$ をそのホモトピーとすると、 $Y \times I$ も可縮なので、

$$\tilde{H} : Y \times F \times I \rightarrow E$$

を考える事ができる。これにより、 $\tilde{f} \simeq \tilde{f}'$ となる。

Theorem 0.1.10

$p : E \rightarrow X$ が可符号のとき、

$$\varphi : C_*(X; H_q(F; M)) \rightarrow E_{*,q}^1(E; M)$$

は Chain map である。

proof) 次の図式の可換を示せばよい。

$$\begin{array}{ccc} H_p(X_p, X_{p-1}) \otimes H_q(F; M) & \xrightarrow{\varphi} & H_{p+q}(E_p, E_{p-1}; M) \\ \downarrow \partial \otimes 1 & & \downarrow \partial \\ H_{p-1}(X_{p-1}, X_{p-2}) \otimes H_q(F; M) & \xrightarrow{\varphi} & H_{p+q-1}(E_{p-1}, E_{p-2}; M) \end{array}$$

$x \otimes y \in H_p(X_p, X_{p-1}) \otimes H_q(F; M)$ に対し、

$$\begin{aligned}
\varphi \circ \partial \otimes 1(x \otimes y) &= \varphi(\partial x \otimes y) \\
&= \varphi(\partial \circ h([\alpha]) \otimes y) \\
&= \varphi(h \circ \partial[\alpha] \otimes y) \\
&= \varphi(h([\alpha]_{S^{p-1}}]) \otimes y) \\
&= \widetilde{\alpha}_{|_{S^{p-1} \times F}}^*(i_{n-1} \otimes y) \\
&= (\widetilde{\alpha}_{|_{S^{p-1} \times F}})_*(i_{n-1} \otimes y)
\end{aligned}$$

ところで、

$$\begin{array}{ccc}
H_p(D^p, S^{p-1}) \otimes H_q(F; M) & \xrightarrow{\tilde{\alpha}} & H_{p+q}(E_p, E_{p-1}; M) \\
\downarrow \partial \otimes 1 & & \downarrow \partial \\
H_{p-1}(S^{p-1}) \otimes H_q(F; M) & \xrightarrow{(\tilde{\alpha}_{|_{S^{p-1} \times F}})_*} & H_{p+q-1}(E_{p-1}; M)
\end{array}$$

の可換図は成り立っており、 $\partial(i_n) = i_{n-1}$ だから、上記の等式を続けると、

$$\begin{aligned}
\varphi \circ \partial \otimes 1(x \otimes y) &= (\widetilde{\alpha}_{|_{S^{p-1} \times F}})_*(i_{n-1} \otimes y) \\
&= \partial(\alpha_*(i_n \otimes y)) \\
&= \partial \circ \varphi(x \otimes y)
\end{aligned}$$

である。

Theorem 0.1.11

$E_{p,q}^2(E; M) \cong H_p(X; H_q(F; M))$, $E_2^{p,q}(E; M) \cong H^p(X; H^q(F; M))$ である。

proof) Theorem 0.1.10 によって、 X の $H_q(F; M)$ を係数に持つ胞体的複体と $E_{*,q}^1$ は同型であった。よってこの homology 群をとっても同型となる。胞体的複体の homology 群は特異 homology 群 $H_*(X; H_q(F; M))$ と同型であったし、Spectral 列の定義から、 $H_*(E_{p,q}^1(E; M)) \cong E_{p,q}^2(E; M)$ であったので求める結果を得る。cohomology についても同様である。

Remark 0.1.12

任意の空間は CW 複体と weak equivalence であるので任意の fibration の $p: E \rightarrow X$ において、 $f: \Gamma X \rightarrow X$ をその weak equivalence とすれば、その pull back

$$f^*(p): f^*(E) \rightarrow \Gamma X$$

を考える事により、weak equivalence ならば homology equivalence であるため、 $H_*(\Gamma X) \cong H_*(X)$, $H_*(f^*(E)) \cong H_*(E)$ となる事がわかり、 $p: E \rightarrow X$ の spectral 列を $f^*(p): f^*(E) \rightarrow \Gamma X$ の spectral 列の spectral 列と定義すれば一般の fibration に拡張できる。また、任意の CW 複体は 0-cell が一つの CW 複体と homotopy 同値になるため、0-cell が 1 つという仮定も本質的に不要である。